

鹿児島県におけるタンカンの黄化・落葉の発生

橋元祥一・内野浩二・橋田泰昌 (鹿児島県果樹試験場)

Syoichi HASHIMOTO, Koji UCHINO and Yasumasa HASHIDA:

Yellowing and Leaf Fall on Tankan (*Citrus tankan* Hayata) in Kagashima Prefecture

鹿児島県では、暖地の有利性を生かせる品目としてタンカンが栽培されており、1997年現在の栽培面積は613haに達している(第45次鹿児島県農林水産統計年報, 1999年)。ところが、近年秋季に葉が急速に黄化落葉する障害がカラタチ台タンカン‘垂水1号’において特異的に発生し、落葉や枝の枯死によって生産が不安定になるため問題となっている。そこで、発生実態を調査したので、その概要を報告する。

1. 材料および方法

黄化落葉の発生状況は、1998年7月から1999年2月にかけて、カラタチ台タンカン‘垂水1号’が栽培されている県下24市町村のうち20市町村の71ほ場を調査した。そのうち19ほ場では、結果量を無、少、多に分けて遠観調査し、黄化落葉の発生状況、冬季における症状の進展と発生樹数の増加を調べた。さらに1999年3月から4月にかけて、上記19ほ場のうち8ほ場について春梢の発生と着花状況を調べた。

2. 結果および考察

葉の黄化は中ろくから始まり、次に葉先から基部に向かって葉脈間がほぼ左右相称に黄化し、最終的に葉身全体に及ぶ(第1図)。本症は主に主枝を単位として発生するため、健全な主枝と黄化が発生した主枝が1樹に混在する場合もみられた。また、黄化が発生した樹はいずれも細根が少ない傾向にあった。

葉の黄化が発生する時期は主として8月下旬から12月であった。1998年における黄化の発生は、20市町村において確認された。樹ごとに調査した19ほ場の、1,194樹における発生割合は15.0%であった(第1表)。これらのうち全体の1.2%に相当する14樹では、黄化は1月に降に発生した。

結果量と黄化の発生をみると、発生割合は結果量が無の樹では28.2%であったのに対し、多の樹では2.4%であり、結果量が多くなると明らかに低くなった(第2表)。

黄化した葉は11月ごろから落葉し始めた。落葉は冬季に進展し、著しくなると枝が枯死した。落葉と枝の枯死は奄美大島地域では著しく、熊毛地域以北の産地では比較的軽度であった。また、冬季に発症した樹の黄化の進展は緩慢で、落葉が少な

かった。

葉の黄化が発生した樹は、いずれも春梢の発生は少なく多数の直花が着花した。また1樹の中で黄化が発生した主枝では直花が、健全な主枝で有葉花が着花している例があり、葉の黄化によって新梢の発生が減少し、直花が増加することが示唆された。

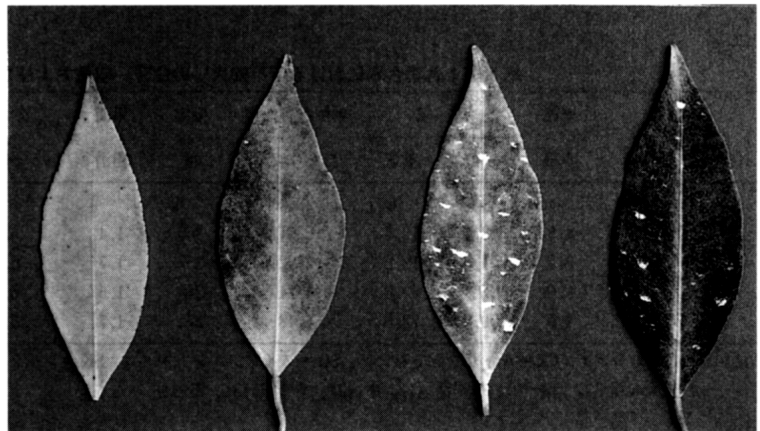
葉の黄化の発生は結果量と高い関係がみられたが、当年の結果量が少ない樹で多発する傾向にあることから、本症の発生は、前年の強い着果負担とそれに伴う細根の発育不良および夏季の水分ストレス等が関与していると推察された。

第1表 黄化・落葉の発生状況 (1998年)

調査ほ場数	19 園
調査樹数	1,194 本
発生樹数	179 本
発生割合	15.0%

第2表 結果量と黄化・落葉の発生状況 (1998年)

結果量	調査樹数	発生樹数	発生割合 (%)
無	372	105	28.2
少	410	51	12.4
中	246	19	7.7
多	166	4	2.4



第1図 タンカン葉の黄化
(右;中ろくが黄変,左;葉身全体が黄変)